

「梅棹忠夫著作集」全22巻解題：第5巻 比較文明学研究

著者	中牧 弘允
ページ	135-135
発行年	2011-03-10
URL	http://hdl.handle.net/10502/4866

比較文明学研究



梅棹忠夫の名を不朽たらしめた『文明の生態史観』を中心に比較文明学の論考・講演をおさめた巻である。文化人類学(民族学)から文明学への飛躍の足跡をたどるうえでも必須の文献である。

文化人類学はいわゆる未開社会や少数民族をあつかう学問だとかんがえられがちである。しかし梅棹は文化や民族のレベルにとどまらない文明学を構想し、文化人類学の限界にひとつの活路をひらいた。すなわち、文明を人間Ⅱ装置系、人間Ⅱ制度系として定義し、文化をその精神的抽象、精神的投影とみなしたのである。そして、人間Ⅱ自然系としての生態系から人間Ⅱ装置系としての文明系への連続的移行について論じた。生態学を基礎に、そこから装置・制度系としての文明を展望したところに梅棹文明学の獨創性がある。

梅棹は文明学を展開するにあたり、まず単独行動からはじめた。その成果が『生態史観』であり、『中洋』論や宗教の『疫学』アナロジーであった。しかし、一九八〇年の還暦シンポジウムを機に組織行動へと戦略を転換した。そして一九八三年、比較文明学会の創立にかかわるとともに、「館長直営」といわれた谷口国際シンポジウムの文明学部門を民博で開始した。

谷口シンポは「近代世界における日本文明」をとおし題目とし、いわば日本というカードを入れた比較文明学であり、比較文明学からの日本研究であった。梅棹は一週間にわたるシンポジウムのすべてに出席し、冒頭の基調講演を担当した。本巻にはそのうち初期の六回分がおさめられている。谷口シンポは一九九八年まで二七回開催され、日本語と英語で報告書が刊行された。

梅棹が構想した比較文明学はたんなる直感や類型論ではなく、総合的な洞察と類比を武器としていた。モデルとしては有機体ではなく生態系が威力を発揮した。そして古代文明から現代文明にまで、世界の五大大陸をまたにかけ、単独ないし組織的に、かつ戦略的見とおしをもって果敢に切り込んでいった戦果が本書である。(中牧弘允)